

報告

第 27 回国際シーティングシンポジウム (ISS) に参加して

東洋大学 ライフデザイン学部 人間環境デザイン学科 繁成 剛

3月2日から5日までアメリカのテネシー州ナッシュビルで開催された国際シーティングシンポジウム (International Seating Symposium:ISS) に参加したので、その概要を報告したい。筆者は一昨年のナッシュビル、昨年のバンクーバーで開かれた本大会に3回続けて参加したことになるが、毎年規模が大きく、参加者も確実に増えていることを実感している。今回は33カ国からの参加があったとの報告があった。日本からの参加者は把握している限りでは8名で、例年より少なかった。初めての試みとして、筆者のゼミの学生を2名参加させた。

開会式の後にはピッツバーグ大学の Condoluci 教授によるアメリカの障害者事情を社会心理学的に分析した基調講演とPT・OTによる一般講演があった。その後は会場となっているゲイロード・オプリーランドホテル & コンベンションセンターの大ホールを使った機器展示会場で、昼食をとりながら見学するという、ISS 定番の企画があった。

車いすや歩行器あるいは自転車などの展示はこのシンポジウムの目玉と言ってもよいだろう。今回はこれまで参加した中では最大規模の展示スペースで、車いすに関連した企業や団体107社が最新の機器を展示していた。小さな幼児用から巨漢用まで、歩行器から電動車いすまで欧米のメーカーが自信を持って開発した機器が並んでいるので、見て飽きることはない。特に印象的だったのは、ハンドサイクルの講義と試乗ができるセッションだった。ほぼ背臥位で地面すれすれに乗って顔の前にあるペダルを回す自転車は、新鮮なスピード感と爽快感が味わえた (図1)。



図1 ハンドサイクルに試乗する参加者

次に目を引いたのは電動車いすに乗ったまま乗車し、電動車いすの駆動輪をローラーで受けて、車いすのジョイスティックで簡単に操縦できるオフロードカートだった。試乗させてもらおうとフルオープンの特ラクターに乗ったような感覚で、広い荒地をどこまでも走れるような気分になった。狭い日本ではこんな巨大なカートを走らせる場所はなさそうだが、さすがはアメリカらしい合理的で楽しい発想だ (図2)。



図2 電動車いすの動力を利用して走行するオフロード用カート

東洋大学 ライフデザイン学部

〒351-8510 埼玉県朝霞市岡48-1

展示会場ではポスターセッションもあり、日本からは舞踏家の福原さんが本協会の大鍋理事と共同で、新素材の布地を使ったダンスのワークショップを発表されていた。大変興味深い企画で、東洋大学でこのワークショップをする話まで発展した。

大会の講演会場では、1～2時間かけて行われるシーティングや車いす適合等に関する約10種類の教育セミナーが平行で実施され、参加者は事前に受けたいセミナーを登録することになっている。その間にペーパーセッションやポスターセッションの時間も設けられている。筆者はOTのKangasさんによる「不随意運動のある子供へのシーティングと移動へのチャレンジ」、ハートフォード大学のCraneさんによる「ISOの定義に基づく姿勢計測」、PTのBetzさんによる「ウィンタースポーツと支援技術」(図3)、「ウォータースポーツ 不安定な環境下のシーティング」、「特殊なニーズに対応した自転車の適合」などのセミナーを受講した。いずれも興味深い内容ではあったが、すでに日本でも取り組まれている技術やアプローチが多かった。



図3 ウィンタースポーツにおける支援技術をレクチャーするOT

おわりに

毎年9月に東京ビックサイトで開催される国際福祉機器展は毎年欠かさずに参加して、最新の車いすをチェックしているが、このISSほど充実した車いすの展示はない。同じ頃にデュッセルドルフで開かれているレハケア・インターナショナルも車いすの展示が多くて楽しめる。いつも車いすの展示会で感じるのは、最新のメカやテクノロジーを売り物にしているのがアメリカ流、洗練されたデザインとエルゴノミクスを売り物にしているのがヨーロッパ流、軽量コンパクトとコストパフォーマンスを売り物にしているのが日本という印象を受ける。アメリカの楽天的なまでのテクノロジー信奉を具現化したような車いすや歩行器も独自の魅力をもっている。辛くて暗いという障害者の印象を吹き飛ばすような、明るく楽天的で自由と自立を重んじるアメリカならではの車いすデザインは単純明快である。

1980年代から90年代にかけて、日本はアメリカのシーティングシステムや支援技術を次々に取り入れ、日本流にきめ細かくアレンジしてユーザーのニーズに対応できるように適合技術を発展させてきた。これからは日本で独自に開発した機器やシーティング技術を北米や世界に向けて発信する時期に来ているのではないかと感じている。技術の進歩を競うのではなく、欧米と連携してユーザーの真のニーズを実現できる技術やシステムを開発し普及させていく時代にさしかかっているのではないだろうか。

来年の3月にバンクーバーで開催されるISSには、日本から多くの参加者と発表があつて国際的な連携を深めるとともに、いつかは日本でもISSのような車いすとシーティングに関する国際大会を開催できたらという想いを抱きながら帰国の途に付いた。